遠門 號 879 巻 5

上田

碗久松山柳巷話説巻之五

東都　曲亭主人編次

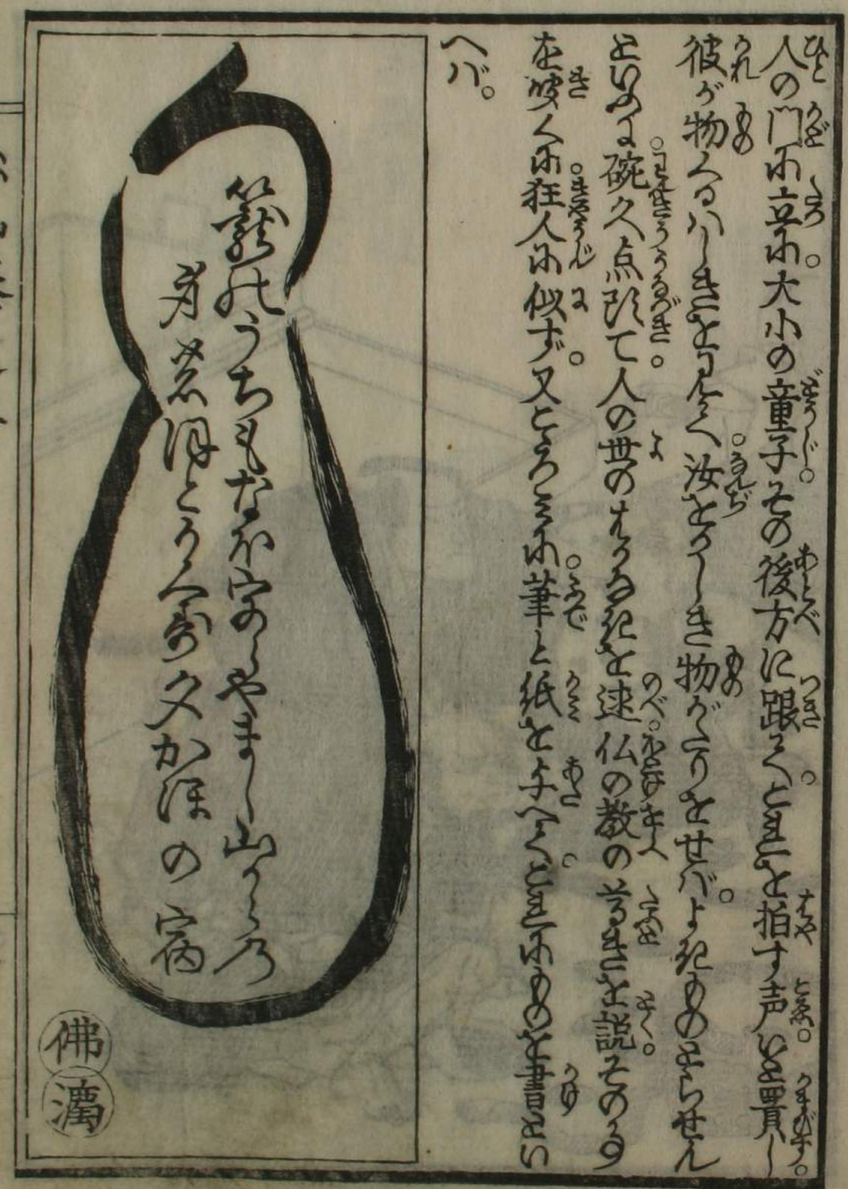
仇ゐ養ふく有無之助父ゐ遺家を起す

蕪婆こゞ家ゆて三人の婦女横死せ〜ゐよろく。彼婆こと松山ゞ親子ゐり〜を人もゐり又碗久ハ松山ゞ結号の夫ゐるよ〜を。廓の長伜ゝ突ゐる志うねき人の死跡を聊も難ふべきゐあらぢきくこゐる碗久主従ゐうち任〜後のゐるどもそゐとゞ隨意ゐり行せゐりさるゐらゐハ八太郎ハ彼家の掟女めのいらハにハ身の暇をとら〜てものく故郷へ飯〜遣〜又野崎松山蕪婆こゞ亡骸ハ實相寺ゐり営ゐえゐる精舎に葬ゐ追善形のごとくゐり営こ碗久ゞ父兎

明治三十八年十月十日購求

石宗達が墓とも彼寺に建るなぞ。今なれ浪花八丁目寺町実相寺の本堂より東南の方に宗達之墓との四ヶ字を彫る石塔あり彼所の人ハとれとも碗久が墓なりといへり。いまだいづれか是なるをしらず。ともかくに碗久ハ松山が死して後何となく物狂ハしくなりて或ハ笑ひ或ハ悲しミ行状日来にも似ざりしかバ。八太郎ハいと苦々しくおもひさまざまに諫れども其のしるしもあらず。このころ伊勢國久保田の近郷六大院村なる西念寺同宿の老法師空我上人と聞えしハ元来權智不測の聖僧なりとてその衆生済度の為二人の徒弟をゐて洛に上り彼此の良賤男女に十念を授けつゝ種々の怨灵鬼病に至るまで法驗あらずといふ事なく。ミなその蔭を蒙るもの多し。八太郎ハこのよしを傳へ聞て。そゞろに歡び聽て碗久を誘引て空我上人の僑居しける空也寺へ詣て。上人に拜謁し蘭折の悲みそ今ハ心も乱れてる碗久が身の首尾を物がたりしまに加持してたまはりかしといふ。彼西念寺ハ空也派にて蕪婆々が前夫服部浦外が菩提所なれバ上人ハ松山親子がるを聞く。ふかく憐み且碗久をも外ならじとおぼしく一議にも及ばず兼引うけ給ひ。さて八太郎に對ひ宣ひけるハ。蕪松山が亡魂を済度し。この弱人を教化すべき因縁あり倩是の淵源を按ずるに。すべてこの件の殃危ハ摂州有馬の妬婦が祟によれり。まづその悪灵を鎮めずハ碗久が狂病終に愈がたからん。ことに来年の今月ハ

西念寺へ参るべう思ふて。汝が主をこゝに預けよ。そのところに参ば験あるべしと説示しゝ。八太郎は篤くその庇を歓び喜こゝ。聊も疑ひず。その身も洛ゐありて。そこらの死世をこゝろつく日ゐく迄たる些の銭を碗久が衣食の料ゆゑに過半は上人ゐ進らせ。碗久は空我上人の憐愍を蒙つゝ。空也寺の客舎ゐありと。いぶも只放に漫行するを上人も又制止あらば。今茲も中冬の央ゐ。ありて空也忌十月十三日ゐ裡ちこゝろしらば上人ある日碗久にひとつの壺盧子を与へ。碗久は壺を愛翫び頭ゆは帝衣の括づきゐ。巾を載き身には垢入くる浅黄縮緬の蔽衣をおるゐ。ところゐる紋紗の皂き十徳を被く彼瓢子を杖のびゆゐ鉢敲の手扮と人の門ゐ立ゐ。大小の童子その後方に跟くと。ともを指す声を買ゐ。彼が物くるはしきをうらく汝をうしき物ぐりをせばよ。死のさらせんとゆゐ碗久点ぢて人の世のすゐる死を速仏の教の尊きを説。その尊を嘆くゐ狂人ゐ似ず。又ところゐは筆と紙を与へくとゐのを書きいへば。



因果應報
現然ごーく
おのく
非命ふ
死を

と書て筆を擲ん人くりも世ぶ出去つるぬそのうを延究て拙ろ
らずんうるらば由緒ある人の色情ゆゑるどゆくうくハるり
んとくるんてひやうくんうくと綽号せり按ずるハ新兵の風
に鳴さんぐも是空生滅の譬に庶ー又ろくくと恐惶の和訓ゆ
女子の書翰ふうくくとうくく結尾とするる男子の簡牘ゑ恐惶
謹言と字すぐでーと文を人のうくに比ばうくくハ終をおれを
るくの謂るり且山ぐらの一首ハ夫木集にうんえて寂蓮の哥ゑり
とあうと天野氏ゲ鹽尻或問帝王編ゆ引又高津の契冲師ゲ
河社ゆも載ろハ哥のところゆと愛さんばるらん硯久ゲ父
宗達ハ和哥を嗜ゆり硯久ゲもまと歌書を好て讀ろとゆり

くのごとくるらば是も一畸人といのべー是いさそ死国平の
直六ハその夜蕪婆ゲ家ゆく追放さと此首彼所ゆ立ちのび
ちゲ面ゆり妻子の自殺するをりんくも露ばりも後悔慚愧
の気ゆなく身の死どころるをまくにつくぐと思ゆ高井ゲ
年来人貯ろ金の蛇とるをそりーハ人のゲ心の惑ゆそ
実ゆ蛇とるをるゆハあらずゲ。ろうをぎも件の不思議に驚怪て
金をば指へ納ゆく共ゆ土中の物をろりというものゆハ虚
言をもゲらえどよりやうを祥ゆるくも松山ゲ指ハ衣裳
髪の飾ずんどよりをゆ多くるべーうる物のひるーく夜臺ゑ
ありて招果るんハいと惜びべー人ろをびべ奪ひさらばや。と思ん

更ゐ年して頃しも三月尽の風雨烈しき夜ゐ移さんその墓
呼ゐ潜び入りて、件の棺ぶを發りんゐ。蒸婆くが棺の中に入り
物すらく金ハ松山が方にあり。さ見びとそきく大ゐ歎びぜて
その金も衣服もおりうくらくに棺ぶ舊のごくに土を掩ひ
石を建辛じて生垣を潜つ出るに雨止風軟く月ひとあくるり
ぬさて荒陵の森の中に金をうめ死ひらぶる石の上ゐ牡ある
甘バとハいつゐ金ゆハゆらぶ。きのふゐ生まれる赤子ゆく
泣声頻りるうに驚き忙走らと退つ又立ひどるくらくびんに
うぶ感ゆもあらびうち返しるぶすまぶ金ゆハるらで。あるも
男児ありしバ忽地ゆちゆゆう。松山有ゐて八月ゐるりゐ

つるをり是長櫃の中ゐゆ入りて笑くるぶ。さてハその子母の胸口より
産まれて死もゆらぶ棺の中にありるを鈍くも金ありを思ひ悦
つくとてまでうて来つるとそ腰くてくるまをひとりぶちふくく
望ををうるひく足ぶ弱ゐ走り去るゐ彼赤子を抱きくる故
胸のあるりハさらるりくも足も癖しと堪ぶくられぶ
ゑバ物をも甘ぶ。るれいゆるるをゐ次の日又彼森にゆるる有れバ。
怪しきるみるるつの燕彼此を花揺しつ何ゆらん衛ぶく赤子
のロゆさし入るくるる。さるがらるのぶ雛鳥を養育ゐ仏くり夜
双悪鬼ゐも歎くるる直六もものくおそろしくるびんて樹間を
続くつく走り去らんとするゐ手足猛ゐ癖麻まく一歩も運び

動〻ぐて。いと〻驚き怪しく。又舊の所へ立飯まゝば手足いと
悩らゝんとくするゆ数回ゆるゞよ只引戻さるゝ安さんにおがえく。
森を出さるゝ〻ことを得ざりしゝば。もゝとまゞ母愛惜しとこれ
ゆ養育せん爲ゆ考するよを死思しつ。母さら赤子を抱きもり
て森を出るゆ燕も忽地ゝえずゆりて。道をゆくと常の如しく。
つゝしゝば直六ハとよるゆ悪心を發せしゝより。ゆの母さりげゆき
嬰児を養へばいく〻びっいば せく思ひて棄もしゝ殺さん
とするゆ總身雞麻て酔るゞごとし。とをのく手を下しゆず。
咳きゆゞら養育に全體の難と日ゆもしゝく堪ぐてく撥ば蒼と
ゆりて膿汁流と出逐ゆ肉脱眉毛落く舊の面影いるゝ足ハ

踝の下より爛れく。膝のく歩行るゆに木履を着く。四足の牛
に異ゆらず畜生道の苦をとの世ゝら稟るのゝるゝゆ慈悲を
人ゆ一碗の飯を乞得てもまづゆの嬰児に飽まで与へその後を
食せざるとば一粒の飯も咽喉を下らずとまも又餓鬼道の苦艱を
似くりさとばとのゆの妻を虚人を殺し亦美理ある子を詭き賣
しその後碗屋の家ゆ仕へく彼家を屓くゝ剰主の碗久を切く
金を奪ひ去らんとゝくゝゆ悪報ゆやくとゝゆ環来く。松山ゞ爲
にその子を養ひ且世ゆ稀るる悪疾を患さるるゝ。さるゝ行
直六ハ浪速津を徘徊して。人ゆゝんらまんも。さすゞゆ面るくや
ありん。次の年の秋ゆ至つゝく洛へ上つて鳥辺野のゝとりに乞

食しと惜うらん命を拯まぐに彼雅子いけや大きゆうりく。
這もるらひ立もする程わるりとの時空我上人いある日田井
八太郎を呼びようく宣ふゆうとちろに西念寺に飯らんと
思のとようく豫ようく汝わ約せーでく某の日妬婦ぐ怨夷を済度
し碗久ぐ災害を禳ひいとすべーちるとぞ。そのるう容易ゆく
るーぐてー。先四條河原わ假屋を構ふく都下の乞食わ旅行ー
寛恵の追福を営ひべーとまーうの准備ありやを問ふく。八太郎
答へく。松山ぐ母蕪婆ぐ如此くこの病願あつく子安の観音堂を
作ようえん為わ年来積貯ふる金影あり是則子、牙糞士の
銭淫奔禍媒の賊ゆるに縦彼堂宇建立の料に寄進すれ

とも。菩薩の受のハーぐ思ひーるぐ。いまぐどその夏を企奥ぐこぐ。
一銭も散さずして密わ秘おけりとまーとぞ施米の料わいてーい
んくとりく上人点ぜくくその金ぞ人わ施すべきものるれ増を
建立ー。僧を供養せんよりハ貧者を救ふの功徳ゆ莫大なり。
今その金を悉く世の窮人わ施ーるぐとの功徳わようく彼
堂を造りうゆる助を汝んを汝満く月の出るぐ如久速わ
用意せよと仰すまぐ。八太郎ぐ果く次の日より四條河原ぐ
假屋を構ふ殿の米銭を積入まて用意既わ整ひ久まぐ空我
上人ハ二人の徒弟を碗久を伴く件の假屋に到り大きゆうる
懺を造りて為摂州有馬湯本藤松先大母妬婦施行施主亮石

氏児碗久妻之毋清春尼といへ三十字を書字し出居の方に立さしのへバ浴中浴外のを食ホ磯の如くゐ集合来るこの絶に洩ろくとなるし。ろくて第三日に到つるく施行る限りとい。その日の曛昏ゐ一人のを食手足ハ腐爛きく餓鬼のごくるが二戈ぢろりゐう稚子を抱くこてゆくゐる車に乗つるづくらとゑを押まひつく来まりこの朝碗久ハとくら清くしくゐりしゐ。八太郎をともに端ちく出くを食ホく物をさらせく居たりしゐ件の稚児碗久をゐく車より這下つまつく携着まひらね舌ゐ爰くと呼びくけくこの裳ゐまつりるまバ碗久主従ふく怪を彼を食ゐ對ひて汝ハこの稚きめく父ゐ母と同ゐ。

乞児ハ涙を潸然と落しけるハ僕が子にあらず。さるハち松山
が妃の疵口より生れたる君が一子なり。僕かく雛病に係りて面
影も変りしまゝ見ざる忘まをひけり。燕婆々が後夫ゆきくれど。ぬハ
服部團平と呼れたる直六が身の果にては、ぞや。まことおそるべき世しを
悪虐の終ゆへ報ひ因果物語首をのべ箇様々々尾ハ如此にて
なりしく。松山ホが指を發きし支雅児のなる燕のすぐておち
もろく笑えおこらするに八太郎ハさらに碗久大ゐ驚きあやしみ。
頻ゐ嘆息していひけるハ。むかし直六ハ松山を誑き賣たりしを
ゆゑ今又松山が子を養へり。天の人を罰しぬるの支遲速ハあれ
己に出るもの己に返らざるハなし。鳴呼おそるべきことなりて。

かく浮世を観ずる折しも。一人の旅客假屋のうちにすゝみ入
つゝ碗久主従に對ひ某ハ有馬の湯本なる藤松といふもの
にて候いかなれバ此の夜あやしき夢をみる壁ハふところの燕枕
方に来りて告ていふやう。まことハ汝が先祖ゆゑ松二郎と呼
れしものなり又とまるなる八愛妾に藤といふ女子なり家
期の愛惜によろしからず。にも燕と生れ年々に家の簷半
に巣を営みぬるが嫡妻妬婦が怨灵蛇となりて巣に跂
登り卵を啖ふこと數回なりしかば究石宗達といひし人のが
雛鳥を愛するのあまり。ある夜件の蛇を打殺して捨たり
しが終に妬婦が祟りによりて寃枉に死し家をも絶たり

きさいあまこゝろを愛ひ〜好意の喜〜こゝに忘れがたく。その恵を復さん為に去年四月朝日その人の孫を養育まこと直六といへ悪捉を懲らし〜てこゝろうるくその嬰児を双抱さま〜変あり。ちゝろに今度善智識の引接によりて吾倩ハいまさらゝり妬婦が怨霊仏果を好く。ゆゑに天堂に生ず。えぢ速に京師四條河原に赴き彼の聖僧に渴〜く謝〜まれとゝろ。ちをもく某その夜の中に旅ごろく只管に路をいそぐとふ至つくこの職をこゝろに果〜てゝゞ曾祖母妬婦がゆゑに作善の施行をちのゝをちまりとゝはちらざるの僥倖ゆく。その歓喜いくそえて言語に述尽〜ゞたゝといへ碗久ハ

とまをいはく。八太郎と顔をこんあハ〜つ。ますく奇ゝりそして。藤松ゆゑいへうとの事大に故あり。そハちゝ〜ゞりちく。父宗達ゞゝりゝゞ泉。松山親子のゝ。観音堂修覆の情厚あつまりの近も審にいはんちゝ千まゞ。藤松いく〜嘆息〜。さそハひ〜ゝゞ家に帰く湯治〜のゝる時常花と假初に妹夫の結びを色のゝる。その人ゆく坐せ〜ゝ寔に妬婦が怨霊の物に触てハ執わくて駿の人に出ゝりゆゝぞ浅ましきちゝに思ひもうけぞ。聖僧の引導にて怨霊得脱せ〜ゝ。自他の大慶とまゝふゝゞ。この報ゆハ。ものまこかを合〜とゝ子安の観音堂を造り更ひぐ〜を。いへ浩所ゝ旅装ちゝる一人の武士向より假屋の門外に立在て

一五一十を窮究し。ずく笠を脱く裡ゐ入るをこんるゐ。とを別
人ゐあらず。鳥屋尾七郎二なりしゐば碗久主従とゐ思ひ子ず
とく上座に迎請じ。別後の恙るを祝すをバ。七郎二ゐいゆう。
某主君の仰を稟く其許の在家を索めぐるゐ稍久し。速
に飯参して。宛石の家を臭しゐとゐつゐ碗久答く父ゐ罪ゐ
きゐゐ。ゆゐえゐ君ゐゆゐ後悔ゐゐくるゐ。ゐゐ。ゐゐ蛮懐を遺
ゐ似ゐをず某商人とゐりてゐり且狂病ゐゐゐ。駿の人ゐ
面をゐんらをしゐば。舊の武士ゐるゐん支却懐しゐゐとの推
児ゐ成長の後家を継しゐゐらば恩沢ずゐゐ甘心すべし。
父ハ無漏路ゐ入らんを願ひ子ハずゐ有漏路ゐ出るをバ今

よりしてとをゐが名を有無之助ゐゐゐゐゐゐに。犹ゐゐゐゐゐ
ゐをゐゐゐば。七郎二点ゐてゐその事に干てハ心易くゐゐゐゐ。
とゐの子成長のゐらを待ず。直ゐ宛石の家督ゐゐらん事仔細有
べゐらずを慮ゐりそのゐを空我上人ハ端近う出る。七郎二藤
松ゐ對面し碗久をんゐりく宜ふゐう。藤松とゐらんゐ力を
合して観音堂を造りゐえんとゐハ支大ゐゐ。是併汝只今
ゐゐらずゐ。その方人をゐゐゐるゐを。施行の善報るゐ。ゐゐれば漏
回報慮の理ハ響の声ゐ慮ずゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ宗達ハ
不慮の戯言によゐく殃危を釀し。将松山ゐ生涯を悔てゐ
ゐをゐゐくその身宋裏の仁ゐ斃を碗久ゐゐ微生ゐ信ゐ

譏りを憑り且服部捕夕ガ貪婪ハ佛に詭るをもて。その家を圍平に倒さ。その妻も終ハ横死す。野嶋ガ自殺ハ淫奔の餘殃なりとなるとさい〳〵えて恨むべきのみ。然とも野嶋ガ寂期の忠義ハよろく。その子に八太郎あり。松山ガ稀なる苦節よろく。死後に一子を産て正ハ是大慈大悲観音薩陀の冥助なり。蕪婆くハその子を愛惜し。前の夫の夙願を果さんとく。玷汚の賊を貪るハよろく。その子を殺し。軀も隨て又ハ伏す。當に知るべし。冥福ハ金銭をもく買ガたし。さハあるに。彼ものもろ善悪相半し。ときを贖ふハ。松山ガ孝と貞とを以くすとくハ於く菩薩の冥助

あるて。揖の中に一子を送神仏ハ私なし。凡夫頑愚ゆゑて公道と私情を分別せず。無智なるガゆゑハ思ひ悞ること多し。豈悲〳〵ならずや。昔宋裏河を渉す兵を撃ず尾生橋梁を抱て死す。その仁と信とハ違ハず。ものもとぶもその行ハもとろ道に稱ず所謂碗久父子ガ蔽とをハるべ。惑くりをいひつべ。又彼團平ガ悪虚ハ更ハ比るハ物なし。いハハ團平の直六ものん。揖を發く嬰児を養ひ悪疾を禀く路傍に餓死ハ汝とれ死ハの人。なれ生を貪つく悪をるさんや。将死を索て苦難を脱んや。いハく之問の人ハ直六忽地車より滾び落く地上に拜伏し。僕実ハ一日も存命んとをもハず上人願くハ

故の人と叫つゝ改を叩き血の涙を流して悔歎しゝば上人ほゞて
屢を寄てそのかたり近く立こゝろ善哉懺悔する人五逆十悪の罪
を滅すべし。今や諸の亡魂既に得脱すいろぞ汝一人を漏すべ
き宜ひてするいち如幻の喩を吟ずらく。

吾観諸法譬如幻　一箇無明諸行業　三種世間能所造
非空非有越中道　春園桃李肉眼暗　楚澤行雲無復有
總是衆縁所合成　不中不外惑凡情　十方法界水連城
三諦宛然離像名　秋水桂花幾醉嬰　洛川廻雪重還輕

封著狂迷三界獄　能観不取法身清
咄哉迷者孰観此　超越還帰阿字宮

吟じ了て念珠を揚直六ゞ改を打ゝば首まゞ落て膝下に滾び千足段に分散るを見んし皮肉ハ化して水となり白骨のみぞ残つゝるゝ折しも何所ゝゝ顕れ出けん一隻の蛇と雌雄の燕と飄ゝ空中に飛揚し忽地三蒂の白蓮花と化し西ゝ靡きて失にけれバ衆皆これを見んとて怪みさてハ怨霊得脱疑ひゝそ歓喜雀躍して堪ざりぬ。くて空我上人ハ次の日空也寺を辞し去て二人の徒弟を倶し西念寺へ帰りゝゝバ鳥屋尾七郎次ハ碗久父子と田井八太郎を伴ひて上人とともに故郷へ立帰るゝ藤松ハ

なれバ伊勢までも尋て慕ひ出ぬさる程に鳥屋尾七郎次ハ白米の城に入つて碗久を城主忍齋に拝謁さし其後松山蕪婆ゝ図平六が一五一十且空我上人の法験に至るまで審に述ければ忍齋大に感嘆して聴て碗久が一子有無之助をもて祖父宗達が家督を嗣し一所領舊のごとく宛行ひ空我上人へハ坊領を寄附し又一宇の坊舎を建立して碗久をこゝに住し七郎次ハも引出物夥あたへけり。て碗久ハ彼此を券縁して子安の観音堂建立するに藤松ハかね白米の城下に逗留し数百金を出してその作事を助け大宮忍齋も又数多の良材を寄進せられし程に日ならず子安の堂宇成就なく奇麗壮観一州に冠たりこゝに於て藤松ハ空我上人に拝辞し。碗久主従に別れて有馬へ立帰りしとかや。かくて伊勢へ消息して親戚のごとく睦しかりしぞ又碗久ハ空我上人の弟子となりて法名を空瓢と唱へ父母ハさら也彼松山蕪婆ゝが菩提を弔ひ主家の武運長久を祈りつゝ齢六十余歳にして大往生を遂たりとぞ。これより先八太郎ハ有無之助を守傳きまゐらせて忠義を尽しければ忍齋このよしを深く賞美して鎧一領太刀一振りをあたへ有無之助成長の後ハ直に城主へ奉公すべき旨を仰するに八太郎これを固辞して従ハずさるによりてその近国に隠れしまず鞭忠を称讃されけるが程なくてぞ宛石田井の子孫振ゝに繁昌てその家幸福の多かりしとかゝり傳へたるも句あり證とす。

千ゑりのこれうちひらく 小まつる

○この發句は。ゆゑる寛政九年。家兄羅文千句満尾の日咏ずるをもつて。予この書を編をるの日舊友何ゞ〜來訪〜〜。不意ゆ家兄が千生瓢の句を听ぜてをゆて更ゆ哀感の情ゆ堪ず。遂ゆ緑〜と局を結べり。家兄名は興旨東岡舎羅文と号す。性俳諧連哥狐嗜く風詠最多〜〜。寛政戊午八月十二日没す。享年四十歳。その次興春己克亭鷄忠と号を性純孝にして書をよくす。亦是不幸短命天明丙午八月四日没す。時ゆ廿二歳。馬琴不肖ゆして名をるを。をろかなり〜。掌稗史を作つて賢愚邪正人生の壽妖禍福得失善悪應報の理を速る毎に然然をして

をづからその不文を歎じ。二兄を景暮せざるを〜。ゆりて人生五十年孰ゝ一編の小説にゆらざる。箕は世の童子ゆ偶予が出思の作書を閲して善を將〜悪を懲らすよりはなほ甚だしきの理を警〜。人を警るの本意遂をりをゆん今をゆ著す碗久話説は。その淵源終く攷索すべきものゆ〜。元日金年越をりゆ浄瑠理本に碗久が文を作るり。是その文ゆ〜わるらんゝをれども。艶曲猥褻をりを諱く取らず。只古老の口碑に伝るをりをりにして新ゆ作設をる物ばかりをゆるべ〜。

文化五戊辰年　元板
文政十四辛卯年正月再板

東都　書林　大阪屋茂吉
浪華　書林　長門屋兵助
堺　書林　住吉屋弥三郎

早引人物故事

東都　關惟充　著

横本　全二冊

△人物故事とは上古神代より近世よりくるまで世々乃
帝王公卿地下人等和歌俳文の名。あるひハ名僧
賢士の異僧より幸卿儒門医学兼人俳諧孝士
列女の伝記とかゝ。武将勇士豪傑強盜ハ
小ぼうしらへ。年歴時代と紀して
き説と挙きゝ。いろはを按ずる名ある人〻同人
好士の姓ひ俳諧俳優よりくるまで名をとりく俗世よ
伝ゝ。ものを載ゝつまびゝらかり。且索る小近きを
要ゝいろはをもて部類ところたる人ハ保留三郎ハ

二八 ▲伊勢三郎義盛ハ判官義經の家臣なり門四七 ▲康頼ハ平判官入
道法名性照と号す治承元年謀叛のよりて鬼界島へ流され
そこの後赦免ありて山双林寺に籠り新大納の時石山寺に尾張の国に同じ
住す 平物 二九 ▲延壽ハ源義盛の遺腹の長者が娘容貌美しく
長成して武勇に仕へて義盛亡びて後尾張に居る 義勲 七さ
阪田藤十郎ハ越後の人上京して故者なり天性和歌の上手にして
貴賤尊ぶる宝永六年卒年二十七死。辞世の句に世を閉べる名の既
字といろはの配して平家の出所ハ 平物 日本
抓書して本伝と求るに便なしむ。古今人物の好悪の
論と弱ぬるに先山書を捜し異伝と主張を叙郎の群書と
関係の貴へるに平家の大全なり

文政新版 懐節用集悉改大成 大本 全

△世小節用の大冊多しとへども。古板のまゝに増補して再刻の物を
字形尚書。且那立庸書の誤字少なふして。此懐節用ハ京師
侯野通高の作にして字畫音訓を韻法に穿鑿改正
せしと加茂季鷹大人の序あり。今古異同を校補
雅俗の文字を撰び増益して世に行ふ。最後の余紙に書
ふ和漢の山川名所風俗事実を画き。世界万国日本国
ならびに東江戸大坂市街案内。関東郡村和武鑑武家
家の図式太刀目録婚礼進物の徳めを和漢勇名武士の
儀式器作通法願ひ諸礼ひの注釈中絲料理獣五

立花生蕃薬湯奏功基人相与舶指南。三世相方位日取吉凶。筭術別掛。堂上官職の沢百官名沢苗字四季往来書状案文多所諸文雑記。名家切紙韻鏡の口伝諸庶物集呪術伝。刀剣古今絵づくし服りの号。年中行事。

代武将伝。神代より当時ふつう数多載の孫説おのゝ

家系図。微細ふつう。弁世俗要用の雑事。影写集

文人雅客伝俳文房小説遠忘の多ふ倍大よ益ふり。右巻号

不の用孫一事ゝて口受奥秘近代ばれば常て生者ふ

並ゝ熟読ゝ師よりてゝの道ふ上達とる者ふ。

今ゝ南里多人伝補て凡三百五十余紙の大本となり

浪速書林群玉堂　安藤通ゝ　河内屋茂兵衛版

再刻

繪抄 校本庭訓往来

金一冊　浪速　峰岸龍文先生校正并書

近刻　東都　戴斗先生画

庭訓往来は中朝文化の文章なり。世人の志しるべき原ふ余が花校小繪抄

庭訓往来は今流布の本と雨ゝ文字脱漏まゝ誤字違ふあり。近来三都の刊板ともに

皆同様にて吾本ふきの本一冊ゝ再刻の次峰岸先生出風ふ出るべきの

未板行なりゝ。ゆえ校正并家耕の本と後ゝ先生云庭訓の校正いうなるのみして且

解しがたきの多ゝ中にも九月十日の仏家の縁谷ゝ絶しがたきの。そ永井政純乃

読解も杜撰ふり外ふ無ふ。ふ仏家の祈ふ改ゝ

又武家ふ花の古宮ふ。ゝ校正清書ゝ偽本の違ゝも没ゝ校本庭訓往来と欲して

余ふ与へらるゝ。ゝ見ゝて九十月の縁言もふ易ゝ今流布の本と八結かゝ先生ふ

書風ふ本ふ。ふ画ふ本彩載ふ先生ふ図ふ面白ゝ。寿ふ国ふ

是庭訓往来の古本ふ。ゝ今是ふ彩板して世ふ廣ゝ志ゝと欲ふ希ゝ四方の諸君ふ今

流布の諸本と比目競の上に来ふ下ふ結ふ願上い況上

文政十年丁亥三月

浪華書林　岡田群玉堂ふ人謹誌

阿古義物語後編　全傳六本 出来

本町庵三馬遺意
狂訓亭主人做綴

前編世ふりて王既よ年のやとのどもはすごその局成法ぶみ
いかゝなるまでに婦女子の書林をはじめて嗣編とちふとあきるを
ゆまで三馬先生筆後たちまちく著作のそだまづこうそ猶よ
春宮は遺憾催促阿古義物語の唐ちゝ秘バ門人三鶯ちゝ〜折
このゝみ口授せてまとしる條文ともくとの後編を綴りとまべ式其序の作ことを
あらぬ只文章の拙ちゝ人予が罪ねやさいの人新編の水解はこのもとこゝ
楚ゝ葉女千綺ぶ山石今よ捕てまとゝ式姫ゝ三助狐の神画仇を折乃
一條亦床世女生肝をとゝ段弁才天女ゝ灵験神徳忠孝節義ゝ
たやとめいと三ゝまとゝ草紙

三鶯改

楚満人書

奥州岩城閼伽井嶽
薬師如来ハ昔龍宮
より上りたまひ霊験
のいちじるしきゆへに
岩城判官政氏公
御信仰あつて祈
願所となされ今に
政氏公ゝ所持の品
々別當浄福寺の
宝物なり右ゝ
此薬ゝ薬師如来ゝ告げ
ゝ傳へ昔より享保年中迄ハ寺ゝ
施薬致されゝ有て手ゝ先祖譲備世ゝ弘め

御免
薬王丸

薬方想元
奥州岩城　竹内周司

大人小児ともに一切の妙薬

大阪高麗橋博労町北へ
賣弘所　浅井壽堂

藥王丸能書

價一包百銅
同半包四銅

癪氣

あくいるえんやまいのさらびおのまひ引て抜おけがあだいみおりまひ二あつさむさ冠り又あんえのやらうみおりおそるとおりいづ母のあくふてもあ山ふ系と引あれいそのこう神のごとし

刺病

アびゆうれいあるまひのうちのだいおそるべきとなりたびくうら山たてもおーもりれどスいちそうあひいるわそるうれいあくこのことりをかりあれいうらひきとりびしてゆるとくぶひ色

氣鬱

さうつとろというちとのかどゑるでもむねふあつまりさぶんあーく去せんとふとろへまくじーとまびそれちの病ふいけてとりまりあれびきとさんびうちとこのへ病根をのぞなり

酒の二日よひ

さけのあろうえひ醒病とて毒ろう病なり。ふ業ふいつひ引まれいいれど夜ふる酒をのこてもふつう永ひとるとこさらるまり又大酒の人びようの業を引れいあるべくなり

腹痛

あつさむさのいてう者くあくりのこひいてこせ又い水のこうりゑどゑそこらいこむまひ式ころりと引れいびこいたちどころるいゆることゆうこそろそてその功をろうあ色

留飲

つうゑんのあういむなさいこと黄水を吐食りつのおさまりあたゆあり又い食りつのをむゆあり体食りも脳中ふてゆれゆきあくれゆく業を引れい留飲の病根を除。

食傷

ちくあこりいうちのこのびこるれへあたものと食ーたらいこと又いゑづき式いこ川ぐこりなどとるこありてゆくはこりい引れいれいたらこのいここゆうこいゆるこ体ん

頭痛

づたうつくこれいい食事ゆるこりそゑそたゑんこなりいけまこれいれいここゆうみいゆ○やまひこちらこ又いけんへこそのれりのびせゆ引入てげんこう神のごとし

藥王丸い右ゑ記と不の所ゆもいろく功能あり二りたここいれ体紙書ゑ記ともへまいまたゑこいそのこちろこゆ奇功ありいあらこてちることるり一ゑこころみそこうだの功能をえ引べし

大坂賣弘所

心齋橋博勞町北入

越前屋三右衛門
河内屋重太郎

別るいりいりゆ上れいけ藥王丸と同名の業外くゆゆここいゆるた私方業方功能きこゆ掠りびゆ子與州長城と言ひ業そこれ

家傳妙方 三國一風藥

一服代十六銅
十服これ百三十四銅

○ろせいつこるゆすー○法つこゆすー
○けんへきゆまひよーー○たんせたよりー
○汲のゆろこゑひよりー○ねびゑこるりー
○ちのみちこりーー○表きこたいゆ

三國一風藥ゆ今世ゆ流布まる業ゆ邪熱ゆ法りぞけ表と解ー裏と補ひ寒暖の邪気とふびゆ飲食の諸毒を消とこと他剤のおりゆ業ゆ家傳の秘方なり一ゑこころこびその奇功顕然たり

取次所

京都 六條魚棚東洞院 近江屋庄兵衛
京都 三條通柳馬場東 近江屋治助
江戸 小傳馬町三丁目書肆 子屋平兵衛
堺 天神北門前 住吉屋弥三郎

摂州伊丹北小路 加島屋嘉兵衛
室町上立賣下ル町 若狭屋宗助
下谷池端仲町書肆 岡村庄助
同 大道筋錦町 大和屋佐兵衛

日本一家
小兒万病 **神仙廣德丸** 價 一包 百銅 同 半包 四十八銅

疳勞 小兒のかんろうとは、才ゆをおとろへたらそうまたのくもつまびたんぐうまぐいまろくるものくはせまろくたりもれいとまろえのゆろたり、

癲癇 てんちんの病いその振ふるえるぐふうい小兒の時そのまぎーあるいはとておけば成人の後いんぐーぢあるのはあらばそのはいとろうとの月人その振ふまろべ

胎毒 母のたいあひのうち毒とうけーいたの兒がるらびいろいろーく或は頭はなまきでた目ようのかおびそのみのそのまくいたいぐくまたいぐをたーたーやうく

諸蟲 小兒はむーしーやとたのものをたべのものをちのあーれときはむーしーはびとそおけばせまびやおるーけーぢどころのむもころむーしーは甘美虫をたべ

驚風 驚風やうは小兒のたいびやうのもとまるはあらばまきまうやうの病おろうとたーいあまねくこころこそのちーあり

夜泣 夜泣はうちのとこのうときるのりおこるあり、いくねもよるまきとれがろのの小兒たるるぐ、つうるーりのくこの薬をそよるたとまのこ妙く、

諸熱 小兒はち熱がとりとてねつあるこ所のおられども ねつあれいがるるびまひありとこおのうさうまこの小兒は大せろこねつあるが付薬と用ひく誤るべし

鳥目 鳥のあおどろきのうく又はいねれはおびあををこれ、ゑどまるはうちの薬くよりおるるこ甘美の用ひ当ぐうちをきるひあるどくばありぐく功のう有

附氣 小兒はるんのまひそおのきこはいかるるらば見をあのあきこうしのうものこ甘美こそのけは用あれば化薬のおぶところあらば行るべ

右はいぐこ所のこうのうい千万人ところこ万はーつもあるのちるきいとるらこ右ーーちのりの余本功能書はくーく右ーとぐ多人ところ裏ス

此御薬は往昔人皇十五代神功皇后御用ひの良方にて大臣武内宿禰調合し奉り三韓までの御鎧の袖に入さ帯ひし御薬なり

神功皇后御鎧袖藥 **神僊神明湯** 價 一包 百銅 同 半包 四八銅

瘀血（おけつ）

ふだん月〻のめぐりあしく［illegible］

痔疾（ぢしつ）

ぢは男女大人小児ともに［illegible］その奇功をあらはすなり

中風（ちうぶう）

ちうぶうの［illegible］大食より［illegible］中風のうれひ［illegible］

神養（しんよう）

［illegible］うまれつき［illegible］その功のふしぎあり

血暈（ちのみち）

［illegible］

黴毒（むしどく）

［illegible］

帯下（こしけ）

こしけ［illegible］

さんぜん さんご 小児

さんぜんさんご［illegible］小児［illegible］

本家調合所　大坂心さい橋むくろう町ぶ入　河内屋重太郎

賣弘取次所追〻諸國ニ弘メ申候　印鑑ある店にて御求メ可被下候